

## 【報 告】

## 発達障害児の父親の文献検討 — 父親を取り巻く環境に焦点を当てて —

大久保麻矢

### A review of the literature on Fathers of Children with Developmental Disabilities — Focus on environment of father —

OKUBO Aya

#### 要旨

発達障害児の父親の現状やそれを取り巻く環境を明らかにすることで、発達障害児の養育者の支援についての示唆を得ることを目的に発達障害児の父親に関する文献検討を行った。結果、多くの研究で父親を母親の主たる支援者として位置づけているところから調査が構成されていることが明らかになった。また、障害の気づきや告知当初において、父親自らが子どもの特徴や家族の状況を受け入れる経過を保証し支える視点と、父親が受け入れるまでの期間、母子の孤立を防ぐための支援の両立が家族支援の視点として必要であることが示唆された。家族の形態が多様化している現在、発達障害児の父親に対して、そして発達障害児の母親の夫に対しての様々なニーズが存在する。支援者が考える「こうあるべき」父親・夫像ではなく、夫婦や家族で話し合い、調整し会える環境づくりも重要な支援となることが考えられた。

キーワード：発達障害 父親 文献検討

Developmental Disabilities Father review of the literature

#### I. 緒言

発達障害児と診断される子どもの数は年々増加傾向にある。発達障害について、その特有の行動面や対人関係面の特徴により、幼少期の養育に困難を伴うことは先行文献（安田 2012, 松岡 2013 他）でも指摘されており、発達障害児の母親と精神疾患罹患についてもその関係性が示唆されている（安田 2012, 道原 2012）。

また、受診した被虐待児に発達障害の疑いが高い子どもの割合が多いことから、虐待のリスクとしても挙げられる（山田 2016）。一方で子どもに先天性の障害があることや認知・行動に非定形的な特徴がみられること自体は、直接的な虐待のリスク要因にはならないという指摘もあり、母子の社会的孤立や養育者の精神疾患罹患は虐待の原因となることも周知のとおりである。このようなことから、発達障害児と虐待の構図は、子どもの言動や対人関係の特徴から増強される育児ストレスや、健常児を想定した育児環境、周囲の不理解、それに誘発される母子の孤立など母子を取り巻く社会的環境によりつくられていることが

推測される。

発達障害児の母親を対象に、子どもの診断前後の母親や周囲の変化を分析した調査（大久保 2016）によると、母親の特徴として繰り返し出てきた言葉は孤立であった。子どもの特徴からくる物理的・心理的な孤立に加え、母を中心とした養育者への様々な特別視は次第に母親のアイデンティティを「障害児の母親」へと変化させ、自身が内面化した障害へのスティグマにより周囲からの孤立を深める結果となっていた。また、孤立した母子はその関係をさらに強固なものに発展させ、母親による子どもの囲い込みに発展し、適切な時期に子どもに必要な支援を受けられない結果を招く恐れもあり、子どもの将来への影響も示唆された。本来、子育ては母親のみが担うものではない。しかし、とりわけ日本では、子育ての第一義的な責任を母親に帰す規範が根強くあり、また、多くの母親はその規範を内面化している。加え、日本人男性の労働時間の長さは、男性の意識に関わらず育児への時間を減少させる結果となっている（大久保 2016）。大家族から核家族へ、また広域から高層へ生活環境が変化した現在、母親の孤立を防ぐキーパーソンは父親である。

そこで本研究では、発達障害児の父親の手記を含む先行研究を概観することにより、発達障害児の父親の現状やそれを取り巻く環境を明らかにすることで、発達障害児の養育者の支援についての示唆を得ることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 分析対象とする文献の検索

「発達障害 父親」「自閉症 父親」をキーワードにEBSCO、CiNii、医中誌、JDreamⅢ、JAIROの情報検索ツールを使用し検索を行った。その際、論文の発行年数は規定しなかった。EBSCOにおいては、出版物タイプを学術専門誌と雑誌に設定した。また、JDreamⅢのファイル選択はMEDLINE + JMEDIplsを選択した。

### 2. 文献の精選手順

#### 【ステップ①】

タイトルよりそれぞれのデータベース内での重複を削除した。

#### 【ステップ②】

アブストラクトの検討により以下の内容を削除対象とした。

- 1) 遺伝や医療（治療）、療育、歴史、法律・制度等の内容が書かれているもの
- 2) 父親に関して書かれていないもの
- 3) 発達障害や自閉症に関して書かれていないもの
- 4) 日本以外について書かれているもの
- 5) 抄録のみのもの

#### 【ステップ③】

すべてのデータベースから抽出された文献の重複確認を行った。

表1 ステップ①②結果

		総数	テーマの 異なり	対象の 異なり	障害名の 異なり	対象国の 異なり	発表形式の 異なり	対象
医中誌 条件設定なし	発達障害×父親	208	146	5	4	1	35	17
	自閉症×父親	66	53	2	2	1	0	8
JDream III JSTPlus + JST7580	発達障害×父親	84	43	1	3	27	5	5
	自閉症×父親	63	29	0	1	25	4	4
CiNii Articles 条件設定なし	発達障害×父親	33	5	1	2	1	3	21
	自閉症×父親	22	13	0	1	2	2	4
EBSCO 学術専門誌・雑誌を指定	発達障害×父親	503	75	2	2	415	7	2
	自閉症×父親	143	104	3	2	0	11	23
JAIRO 条件設定なし	発達障害×父親	7	0	1	0	0	0	6
	自閉症×父親	6	3	0	1	0	1	1

\*テーマの異なり：医学、教育学、療育など 対象の異なり：母親のみの研究など 障害名の異なり：発達障害児以外の父親が対象

対象国の異なり：対象が日本以外の国について書かれている 発表形式の異なり：抄録など

表2 対象論文の例

	対象論文	概要
【母親の支援者として 位置づけられる父親】	岡野ら，2012「広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスと父親の母親に対するサポート」	父親の理想のサポートと実際を父母それぞれから調査した
	那須野，2012「発達障害児の父親グループにおける意識の変化について」	父親グループの働きかけが、どのように、子ども理解、養育への協力、母親支援に繋がるか、また父親自身の意識にどのような変化をもたらすか明らかにした
【家族機能維持のための 父親の役割】	飯田・二宮，2016「自閉症児を抱える家族のファミリーレジリエンスにおける父親の役割」	学童期の自閉症児の父親役割の遂行課程を明らかにした
	篠田，2013「発達障害を持つ子どもの父親における障害の認識・理解とストレス－父母間の相違に注目して－」	父母間の子どもの障害に対する認識・理解とストレスの相違を明らかにした
【父親の心理】	今西，2013「発達障害児を育てる父親の生活体験：3人の父親と息子達の歩み」	発達障害児の父親がどのように成長過程しているのか描いた
	和田・林，2013「高機能広汎性発達障害児をもつ父親の心理的体験過程について」	高機能広汎性発達障害児をもつ父親の心理的体験過程を研究者の立場から明らかにした
【父親の声】	市川，2012「父親たちによるリレー寄稿 発達障害児における父親の役割とは：自らの経験を通して」	発達障害児を育てる父親の経験談を父親自身が執筆した
	大屋，2012「父親たちによるリレー寄稿 発達障害児の父親だからできること・やるべきこと・やっておけばよかったこと」	
	新保，2014「父親たちによるリレー寄稿 父親だって、みんなちがってみんないい」	

### Ⅲ. 結果

2018年9月13日の検索結果、EBSCO（発達障害）は143件、（自閉症）は543件であった。CiNiiは（発達障害）33件、（自閉症）22件であった。医中誌は（発達障害）208件、（自閉症）66件であった。JDream IIIは（発達障害）84件、（自閉症）63件であった。JAIROは（発達障害）8件、（自閉症）6件であった。

ステップ②の段階で91件、更にステップ③を経て40件が抽出された。(表1参照)

ステップ③で抽出された40件の内容を精読し分類した結果、【母親の支援者として位置づけられる父親】7件、【家族機能維持のための父親の役割】12件、【父親の心理】9件、【父親の声】12件となった。

【父親の声】では、発達障害児を育てる父親が書いた手記であり、それぞれの父親が子どもの障害の受け入れ過程や生活の実際、仕事への思いや社会への発信などそれぞれのテーマで語っていた。【父親の心理】では、医療従事者や研究者が、アンケートやインタビューを通して父親の現在の心理や変化の過程を分析しており、それをもとに親の支援を考察していた。【母親の支援者として位置づけられる父親】と【家族機能維持のための父親の役割】は、発達障害児を育てる家族メンバーとしての父親の役割や父親・母親のストレスの差異、父親のサポートの実際などが挙げられていた。

## 考察

### 1. 父親の声

先行研究によると障害児の父親の役割として、「経済的に家族を支える」「母親のサポートをする」が挙げられている(下野ら 2013, 長嶋 2008 他)。また、母親と比べ「弱さ」を表出できない心理的傾向も指摘されている。今回のレビューにおいても同様の結果が複数の文献でみられた(市川 2012 他)。一方で、父親の手記では、「父親の受容フェーズは、母親より数段、遅れている(笹森 2014)。」とした上で、「自分の気持ちできっかけがつかめるまで、母親をはじめ周囲には「待つて」ほしい(笹森 2014)。」と父親としての希望を伝え、父親の心のレセプターが開いたら父親の立ち位置で、強みも発揮できるようになる(笹森 2014)や父親同士が地域の壁を越え、繋がりを築き、母親が作り上げた地域の中での強固なネットワークに、父親の地域を超えたネットワークが加わることによって、クモの巣のようなネットワークを作り、大きなムーブメントを起こせるのではないかと(新保 2014)、わが子をありのままに受け入れる前に、われわれにはまだやれることがあるのだ(藤阪 2015)など社会で培ったノウハウや幅広い人脈、行動力など父親の強みが挙げられている。

もちろん、手記を書く父親たちは積極的に育児を行っているバイアスはある。しかし、障害の気づきや告知当初において、父親自らが子どもの特徴や家族の状況を受け入れる経過を保証し支える視点と、父親が受け入れるまでの期間、母子の孤立を防ぐための支援の両立が家族支援の視点として必要であると考えられる。

### 2. 研究者が捉える父親像

父親研究では、父親自身を調査対象としたものと母親の育児パートナーとしての父親を母親の視点から分析したものに大別された。調査の根底には、障害児の育児が母親中心に行われており、父親の育児が圧倒的に少ないことがある。これは、性役割分業や男性(父親)への規範に由来し、父親研究全般でいわれていることであり、子どもの障害の有無によっておこるものではない。ここで注目したいのは、父親の役割認識に関する研究結果から「母親のサポート」役割が出てきているだけではなく、「母親のサポーターとしての父親」を前提に設計されている父親研究が多く存在する点である。子どもに障害がある場合、子どもの世話に関する負担は大きくなり、それに伴い母子の紐帯は強くなるといわれている。加えて、母親の育児ストレスは強く、虐待にまで及ぶケースも指摘されている。この母子関係の構図のもとに、家族機能を強める、母親のストレスを軽減させる目的で、母子に一番近い他者である父親をサポーターとして位置づけている。

役割理論では、「社会的役割は、他者の期待に基づく意味でもなく、両者の相互作用の結果として多かれ少なかれ共有される、いわば「準客観的」な構造物である」（栗岡 1993）とされている。すなわち、父親本人がその役割を選択しているだけではなく、そこには社会が求める役割との相互作用があるといえる。本結果に照らし合わせると、夫婦間の性役割規範が発達障害児の親である夫婦間にも根強く存在することに加え、それは、子どもに障害があるが故に強調されやすいことが考えられた。

岡田（2014）はその手記の中で、「もちろん、それまで無関心であったわけではない。それは自信を持って言えることである。ただそれは父親としてではなく、夫としての思いであった。つまり、「自閉症児の父親」としてではなく、「自閉症児の母親の夫」として関わっていたのであった。」と述べている。父親役割と夫役割を明確に区別することは不可能であるが、先行研究でもその区別は曖昧であり、父親の育児行為は、子どもに志向する直接的な育児行為と、子どもに志向する母親の行為をサポートする間接的な行為に分けられる（児島、田中 2014）など、育児行為の中に2つの役割を包括したものもある。一方で、女性には「母親役割」が強調されており、「障害児の父親の妻役割」に関する研究は確認できていない。岡野ら（2012）の調査によると、妻は夫としての母親へのサポートだけではなく、子どもについてのサポートも希望しているという結果が出ている。また、父親の手記からも積極的な子どもへの訓練など（藤阪 2015）父親が主体となり育児や療育に取り組む場面が描かれている。手記では、父親自ら子どもの特徴を受容し動き出すタイミングを待ってほしい（笹森 2014）とある一方で、研究文献では、母親の夫として母子の孤立を防ぐため妻の話を聴き、時にレスパイト目的で母親を育児から開放し、子どもの特徴を受け入れ子どもの成長を夫婦で喜ぶ（岡野ら 2012, 児島、田中 2014）姿が求められており、その乖離は大きい。家族の形態が多様化している現在、発達障害児の父親としての、発達障害児の母親の夫への様々なニーズが存在する。支援者が考える「こうあるべき」父親・夫像ではなく、夫婦や家族で話し合い、調整し合える環境づくりも重要な支援であると言えるだろう。

## 結論

発達障害児の父親の現状やそれを取り巻く環境を明らかにすることで、発達障害児の養育者の支援についての示唆を得ることを目的に発達障害児の父親に関する文献検討を行った。その結果、多くの研究者が家族機能を強める、母親のストレスを軽減させる目的で、母子に一番近い他者である父親を母親の主たる支援者として位置づけることから調査研究を構成していることが明らかになった。また、父親の手記からは父親自らが動き出すまで待ってほしいとの要望もあり、障害の気づきや告知当初において、父親自らが子どもの特徴や家族の状況を受け入れる経過を保証し支える視点と、父親が受け入れるまでの期間、母子の孤立を防ぐための支援の両立が家族支援の視点として必要であることが示唆された。また、家族の形態が多様化している現在、発達障害児の父親に対して、そして発達障害児の母親の夫に対しての様々なニーズが存在する。支援者が考える「こうあるべき」父親・夫像ではなく、夫婦や家族で話し合い、調整し合える環境づくりも重要な支援となることが考えられた。

障害児のそして発達障害児の父親に関する研究はまだ少数である。今後、それぞれの父親の子育ての現状や思いを個々のケースレベルで研究の手法を用い明らかにしていく課題が見いだされた。

本研究はJSPS科研費（課題番号：JP18K10405）の助成を受け実施した研究の一部である。

## 引用・参考文献

- ・飯田直美, 二宮一枝. 自閉症児を抱える家族のファミリーレジリエンスにおける父親の役割. インターナショナルnursing care research. 2016, 15 (2), p.93-103.
- ・石田史織, 高橋宏子, 五十嵐 久人. 療育センターを利用する発達障害児の成長を支える父親の役割. 長野県看護研究会論文集. 2018, 38, p.7-10.
- ・井田美沙子, 井上雅彦. 父親支援の研究と実践: 家族がサポートし合える環境づくり. 広汎性発達障害の明日のために. 2013, 12 (1), p.44-50.
- ・市川宏伸. 父親たちによるリレー寄稿 発達障害児における父親の役割とは: 自らの経験を通して. 広汎性発達障害の明日のために. 2012, 11 (2) p.6-13.
- ・今西良輔. 発達障害児を育てる父親の生活体験: 3人の父親と息子達の歩み. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2013, 9(1), p.27-34.
- ・上村逸子. 保護者が望む教育相談についてー発達障害児の場合を中心にー. 大阪教育大学障害児教育研究紀要. 2010, 33, p.9-20.
- ・大久保麻矢. 発達障害児の母親になる過程: 「診断」による母親と周囲の人々の変化. 人間文化創成科学論叢. 2016, 19, p.127-134.
- ・大久保賢一, 井上雅彦, 渡辺郁博. 自閉症児・者の性教育に対する保護者のニーズに関する調査研究, 2008, 46 (1) p.29-38.
- ・大瀬栄子. 広汎性発達障害を持つ児の保護者が医療に求めるもの. 健生病院医報. 2006, 29, p.77-79.
- ・大塚晃. 父親たちによるリレー寄稿 障害のあるわが子が教えてくれたこと. 広汎性発達障害の明日のために. 2013, 11 (3), p.6-12.
- ・大塚景子, 堀田法子. 早期療育に通う子どもをもつ両親の療育への思いと育児ストレス. 小児保健研究. 2013, 72(6), p.854-862.
- ・大屋滋. 父親たちによるリレー寄稿 発達障害児の父親だからできること・やるべきこと・やっておけばよかったこと. 広汎性発達障害の明日のために. 2012, 11 (1), p.6-14.
- ・大谷達之. 自閉症者の療育について. 順天堂医学. 1990, 36 (3), p.428-429.
- ・小原玲. 父親たちによるリレー寄稿 いつまでも笑顔を見せて生きて行って欲しい. 広汎性発達障害の明日のために. 2013, 12 (2), p.68-74.
- ・岡田稔久. 父親たちによるリレー寄稿 それは、二人から始まった. 広汎性発達障害の明日のために. 2014, 13 (1), p.76-81.
- ・岡野維新, 武井祐子, 寺崎正治. 広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスと父親母親に対するサポート. 川崎医療福祉学会誌. 2012, 21 (2), p.218-224.
- ・金本恵蘭ら. 障がいのある子どもとその保護者への対応. 保育研究. 2005, p.167-176.
- ・小島未生, 田中真理. 障害児の父親の育児行為に対する母親の認識と育児感情に関する調査研究. 特殊教育学研究. 2007, 44 (5), p.291-299.
- ・栗岡幹英. 役割行為の社会学. 世界思想社. 1993, p.38.
- ・笹森史朗. 父親たちによるリレー寄稿 発達障害児の父親の役割とは. 広汎性発達障害の明日のために. 2014, 12 (3), p.68-73.
- ・篠田有希. 発達障害を持つ子どもの親における障害の認識・理解とストレス 父母間の相違に注目して. 白百合女子大学発達臨床センター紀要. 2013, 16, p.74-82.
- ・下野純平, 遠藤芳子, 武田淳子. 在宅重症心身障害児の父親が父親役割を遂行するための調整過程. 日本小児看護学会誌. 2013, 22 (2), p.1-8.
- ・新保浩. 父親たちによるリレー寄稿 父親だって、みんなちがってみんないい. 広汎性発達障害の明日のために. 2014, 13 (2), p.56-62.
- ・玉井真理子, 小野恵子. 発達障害乳幼児の父親における障害受容過程 聞き取り調査4事例の検討. 乳幼児医学・心理学研究. 1994, 3 (1) p.27-36.
- ・遠山久仁子. 発達障害のある子どもを持つ親を巡る動向ーその論点の整理のためにー. 西南女学院紀要. 2011, 15, p.55-64.
- ・中野三津子, 辻井弘美. 発達障害をもつ子どもの家族とレジリエンス. 全日本病院出版会. 2013, 155, p.67-73.
- ・長嶋聖子. ダウン症乳児の母親が期待する父親の役割. 日本地域看護学会誌. 2008, 11 (1).
- ・南雲岳彦. 父親たちによるリレー寄稿 発達障害児の父親の役割とは: Run4uの設立経緯とその目指すもの. 広汎性発達障害の明日のために. 2013, 12 (1), p.16-24.
- ・那須野康成. 発達障がい児の父親グループにおける意識の変化について. 愛知学泉大学・短期大学紀要. 2012, 47, p.83-88.
- ・西田千夏. 要発達支援児を育てる親の内省が親子関係構築に関与する過程. 武庫川女子大学博士(臨床教育学)学位論文. 2016, p.1-24.
- ・西村辨作. 発達に遅れをもつ子どものいる家族. 聴能言語学研究. 1999, 16(2), p.115-121.
- ・野沢和弘. 父親たちによるリレー寄稿 障害者虐待防止法が成立するまでの15年. 広汎性発達障害の明日のために. 2011, 10 (2), p.54-60.
- ・野村智実. 幼児期の自閉症スペクトラム障害児を有する父親の育児に関する文献レビュー 父親の心理的側面と父子相互作用に焦点を当てて. お茶の水看護学雑誌. 2016, 10, p.6-26.
- ・原井川誠仁, 是永かな子. 保護者の障害受容において父親が果たす役割ー父親の家事・育児行動への参加に着目してー. 高知大学教育学部研究報告. 2008, 8, p.137-148.
- ・藤坂龍司. 父親たちによるリレー寄稿 わが子のセラピストになった父親.

- 広汎性発達障害の明日のために. 2015, 13 (3), p.58-64.
- ・福島豊. 父親たちによるリレー寄稿 発達障害をもつ子どもの子育てを通じて学んだこと. 広汎性発達障害の明日のために. 2011, 10 (1), p.64-70.
  - ・松岡純子ら. 広汎性発達障害児をもつ母親が体験している困難と心理的支援. 日本看護科学会誌. 2013, 33 (2), p.2-12.
  - ・馬見塚珠生. 【家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援】当事者活動の実際 父親の子育てネットワークづくり. 別冊発達. 2017, 33, p.186-191.
  - ・道原里奈, 岩元澄子. 発達障害児をもつ母親の抑うつに関連する要因の研究－子どもと母親の属性とソーシャルサポートに着目して－. 久留米大学心理学研究. 2012, 11, p.74-83.
  - ・三原博光. 自閉症者の家族の心理的考察－2人の自閉症者を持つ父親の事例を通して. 山口県立大学社会福祉学部紀要. 2004, 10, p.105-113.
  - ・メイヤー・マックス. 【かがやき情報】父親としての学校・地域との関わり. かがやき. 2006, 2, p.52-56.
  - ・安田すみ江, 後藤麻美, 加村 梓. 発達障害を持つ児の保護者の育児上の困難さに関する調査. 小児保健研究. 2012, 71 (4), p.495-500.
  - ・山岡修. 父親たちによるリレー寄稿 発達障害をもつ子どもの子育てを通じて学んだこと. 広汎性発達障害の明日のために. 2012, 10 (3), p.74-79.
  - ・山岡祥子, 中村真理. 高機能広汎性発達障害児・者をもつ親の気づきと障害認識: 父と母との相違. 特殊教育学研究, 2008, 46(2), p.93-101.
  - ・山田不二子. 医療から見た障害児虐待・ネグレクトの実態. 日本重症心身障害学会誌. 2016, 41 (1), p.59-64.
  - ・和田浩平, 林陽子. 高機能広汎性発達障害児をもつ父親の心理的体験過程について. 小児の精神と神経. 2013, 53 (2), p.137-49.

大久保麻矢（和洋女子大学 看護学部 看護学科 准教授）

（2022年11月15日受理）